

感性を育む和学講座第 22 回

～実りの秋と年賀状の作法 やまと言葉国学～

実りの秋

神嘗祭から新嘗祭へ

元々「まつり」というのは「神様を祀る」「先祖をお祀りする」と表現するように、神仏をおもてなしすることと言えます。

大言海(昭和初期の国語辞書)によると「まつる」は「誠を致し、儀を正し、神霊を慰む」とあります。

祭りは春と秋に多く催されます。それは、宮中の祈年祭と新嘗祭に対応しての予祝祭と収穫祭でもあります。

そして、神社および宮中での収穫祭が神嘗祭から繋がる新嘗祭となります。

神嘗祭はその年の実りである新穀(初穂)を天照大神に捧げる感謝祭です。

天照大神を祭神としている伊勢神宮で行われます。

稲作は天照大神が瓊瓊杵尊(ニニギノミコト)を中つ国(日本神話における地上界。転じて日本)に降り立つ、いわゆる天孫降臨の際に稲を授けてお言葉を述べられた「**斎庭(ユニワ)の稲穂の神勅**」に由来しています。

「**斎庭の稲穂の神勅**」は天照大神が瓊瓊杵尊に託した三大神勅のひとつです。

稲作は、天つ神のご下命、天つ神より委任を受けたものであり、収穫は神のものであるということから、まず新穀を神々に献上して、天皇は残りをいただくという精神に沿った祭祀が神嘗祭です。

「神嘗」は「神の饗(あえ)」からきていると云われています。「饗」は食べ物でもてなすという意味があります。

天照大神は外宮の豊受大御神に奉ります。ゆえに、神嘗祭は伊勢神宮では「外宮先祭」となっています。

神嘗祭は伊勢神宮では最も重要な祭祀で、伊勢神宮においては**神嘗正月**といわれ、装束や器具を新しいものに取り替えます。

飛鳥時代後期の大宝律令制定時に「神祇令(律令の中で神祇に関する制度)」には国家祭祀の一つに神嘗祭が明記されました。奈良時代には、

天皇陛下から伊勢神宮へ幣帛使(神様へ供物を献上する特使)が遣わされます。

平安時代には、宮廷の年中儀式となりました。

伊勢神宮への例幣使派遣は応仁の乱以降中断されますが、1647年後光明天皇の特旨により、例幣使派遣が復活されてからは中断されずに行われています。

1871年(明治4年)以降は幣帛使派遣に加えて、皇居の賢所において天照大神に神饌を献上し神嘗祭の儀式が行われています。神嘗祭の儀式に先立って、天皇陛下は伊勢神宮を遥拝(遠くから拝む)されます。

1908年(明治41年)制定の「皇室祭祀令」では大祭に指定されています。

「皇室祭祀令」は1947年(昭和22年)5月2日に廃止されたのですが、

それ以降も

宮中および伊勢神宮では従来通りの神嘗祭が行われています。



神嘗祭の約 1 か月後には、天皇陛下が新穀を召し上がる「**新嘗祭**」が行われます。

新嘗祭は宮中をはじめ、全国各地の神社で執り行われている宮中祭祀であり、宮中祭祀の中でも最も重要とされている五穀豊穡を祝う収穫祭です。

新嘗祭の主な儀式には前日に天皇陛下の**魂の活力を強化**する鎮魂祭、当日神々や天皇の御霊が祀られている宮中三殿で新嘗祭を執り行う奉告(神、貴人に知らせること)を行う新嘗祭賢所・皇霊殿・神殿の儀、そして夜には新穀を神々に献上し、天皇陛下自らも神前にお供えした同じものを召し上がる神嘉殿の儀があります。

太陽の光を受けて成長した稲穂には、太陽神である**天照大神の靈威**が宿っており、瓊瓊杵尊の子孫である天皇陛下が大嘗祭(天皇陛下が即位後初めて行う新嘗祭)において、新穀を召し上がることで、天照大神の靈威を身に付け、それを毎年の新嘗祭で更新することが新嘗祭の意義であるという説もあります。

いずれにしろ、天皇陛下が、国家と国民の安寧と平安を祈願し、翌年の五穀豊穡もお祈りされます。



神嘗祭は元来旧暦の9月17日で、新嘗祭の約2カ月前に行われていました。新暦になると9月17日では稲穂が実るには早いため10月17日になり、間隔が1カ月に縮まったのです。この両祭りに関して、江戸時代後期の皇学者である鈴木重胤は、租の納め始めに伊勢神宮に奉り、納め終わる11月に天皇が召し上がるという順序を意味している、と説いています。



手紙と年賀状の作法

手紙の形式

前文

頭語…謹啓 拝啓 一筆申し上げます 前略など
時候の挨拶…季節の言葉と相手の安否を訊ねる
※「前略」の場合は省く

主文

起辞…さて ところで 早速ですが
本文…手紙を出した要件

末文

結びのあいさつ…この手紙の主旨を端的に記す
結語…敬白 敬具 かしこ 早々

後付

日付 差出人 宛名
脇付…みもとに 机下 侍史

※「追伸」

プライベートの手紙

- ・文章は自分の言葉で
例)木々も色づき、燃ゆる秋の訪れです。
- ・形式にはこだわり過ぎない
差出人の名前は忘れずに
- ・相手との繋がりを考慮して
年齢差、立場、相手の性格
- ・便箋、封筒の選択も楽しんで

冠婚葬祭の手紙

- ・縦書きが正式
- ・便箋、封筒は白
特に、弔事の手紙の場合は白の便箋一枚におさめる。
- ・句読点はつけない

葉書の形式

- ・基本的には、手紙の形式と同じ
- ・後付けは不必要
- ・親しい間柄や、目上の人へ出すのでなければ、頭語・結語も省略しても良い
- ・十行ぐらいの、短い文章なら、文頭を一文字下げて書く必要はない
- ・葉書はカジュアルになると心得ておく

手紙・葉書の歴史と現代の通信手段

日本では、木簡と呼ばれた薄い細長い木の板に筆ひとで文字を記して、離れた人に届けていました。

平安時代になると、紙漉きが行われるようになり、木の代わりに紙が使われるようになっていき、通信手段は木簡から書簡へと変わっていきます。

江戸時代には飛脚の普及により、書簡のやり取りが多くなります。

内容や、相手との間柄などによって多様な書式・書札礼(書簡の礼法)がありました。

明治時代になると西欧に倣って郵便制度が確立し、葉書が普及したこともあり、手紙がさかんに使われるようになります。

通信手段として、手紙・葉書が頻繁に使われたのは昭和時代、ファクシミリが普及するまでだと考えられます。

昭和の終わり頃から平成の始めにはファクシミリが中小企業、商店で使われるようになります。やがて一般家庭にも普及しますが、携帯電話も一般の人も持つようになります。

また、企業などは通信手段として電子メールを使うようになります。

パソコンが持てる時代になると、一般の人も電子メールを通信手段として使用することも増えました。

平成時代後半になると誰もがスマートフォンを持ち、家族・友人などで SNS のメッセージで要件を済ませるようになり、今に至っています。

このように、人と人を繋げる通信手段は、時代とともに変化してきました。通信手段がどのように変化しても、人と繋がりたい、という気持ちは変わりません。そのために、最も良いのは直接会うことです。現代では、オンラインで会うこともできます。離れた場所に居る時はとても便利です。

SNS は便利ですが、簡単に繋がることは簡単に切れることでもあります。電話は表情が見えないのですが、声で表情がわかります。電子メールは、無機質ですが、記録にもなり、言い間違い聞き間違いが起こりにくいというメリットもあります。

手紙は、時間がかかるのですが、字体や表現でその人らしさが表されます。このように、どの通信手段にもメリットデメリットがあります。

昨今は多くの通信手段があります。お相手や場合によって、どの通信手段を使うか判断する必要があります。

ちなみに私は、お礼とお詫びは自分の声で、あるいは自筆で、と考えています。

電子メールのマナー

- ・宛先、送信人は確認する
- ・時候の挨拶などは短く
- ・要件は簡潔、明確に
- ・返信は一両日中に

電話のマナー

- ・架けた相手をかめめる
- ・相手が対応できる状態を確認する
- ・挨拶は手短かに
- ・声のトーンは注意して
- ・日程、時間、場所は明確に、または繰り返す
- ・終える時は丁寧に

SNS のマナー

- ・送信する時間を考慮して

- ・相手との関係性を考えて、言葉は選ぶ
- ・無機質な文字になることを踏まえる
- ・一時的な記録と捉える
- ・正式な通信手段ではないと心得る
- ・繋がった元を考える

年賀状の作法

- ・年賀状とは何か
 - 一年で最初の挨拶
 - 新年を迎えた喜びをお互いに讃える
- ・相手との関係性によって言葉を選ぶ
 - 謹賀新年
 - 初春のお喜びを申し上げます
 - 明けましておめでとうございます
 - 賀春と迎春の違い
- ・出していない相手から届いた場合
 - 先に受け取ったお礼を述べるべきか、あるいはさりげなく出すか
- ・年賀状を出すのが遅くなった場合
 - 関東と関西の違い
 - 寒中見舞いを差し出す時期
- ・喪中欠礼について
 - なぜ喪中欠礼を出すか
 - どの範囲で出すのか
 - 2親等まで
 - 喪中期間

